



孔  
子  
紀  
年  
卷  
七

5  
49  
7

七





曾門  
49  
卷

飛鳥為賀喜

目次

- 一 後柏原院御製表
- 一 神武天皇御製表
- 一 誓姻表
- 一 官漁師の歌
- 一 民の忠
- 一 隠士石介
- 一 辞世の歌
- 一 郡子辞世の詩
- 一 子と母の歌
- 一 後鳥羽院御製表
- 一 ちのふた歌
- 一 富士の歌
- 一 松多阿求の歌
- 一 吉川惟足
- 一 齊藤俊一が辞世の詩
- 一 烏丸巫相辞世の歌





- 一 松平直能朝臣辞世
- 一 漫吟集
- 一 集外歌仙
- 一 隠士園字好歌
- 一 小澤芦菴うゝ
- 一 八朔のうゝ
- 一 能登
- 一 一二の橋
- 一 句の花 階お拓
- 一 芭蕉集
- 一 隠士長流
- 一 一路居士
- 一 祇園権子
- 一 西洞院のうゝ
- 一 芝山敬のうゝ
- 一 後醍醐天皇御製
- 一 初巻れ句
- 一 夕立
- 一 時雨のうゝ
- 一 修學寺八景れ初歌

一 藤房々の歌

一 東武實録の初歌



○後柏原院の御制を 崑崙橋茂世述

世に傳へしはついでに信風は十餘年けてゆくを  
橋に於て御代に是れあらばまにあらく高野の邊に  
蜂起しりしに兵革のちやうかぶつゝも世に  
しる事ありしは天のひびきに御名のよみて昔國の  
ありしにその中ありての事ありしに御名のよみて  
の人をえよむ御名をよむはこれに御名をよむ  
目とせしれし事いづれにありしに天子大  
御とて列國の大名ももつてし御名をよむはこれ  
て天下國を治めしことしは士農工商のよしを











~~~~~  
~~~~~

○宜洵卿上款

前流向日記  
~~~~~  
~~~~~

春聲

~~~~~

夏色

~~~~~

海之略島

~~~~~

秋音

~~~~~

冬月古意

~~~~~

雪上亭

~~~~~

○富士北嶽

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~







○ 此の如くして、世にあらざるものなり。新世の事、此の如

風物花鳥

惜しむるもの、花の葉、鳥の鳴、此の如くして、世にあらざるものなり。

此の如くして、世にあらざるものなり。新世の事、此の如くして、世にあらざるものなり。

信濃

○ 此の如くして、世にあらざるものなり。新世の事、此の如くして、世にあらざるものなり。

信濃國、小信、大信、此の如くして、世にあらざるものなり。

此の如くして、世にあらざるものなり。新世の事、此の如くして、世にあらざるものなり。

○ 隠士石外

石外、此の如くして、世にあらざるものなり。新世の事、此の如くして、世にあらざるものなり。

朝、此の如くして、世にあらざるものなり。新世の事、此の如くして、世にあらざるものなり。

解、此の如くして、世にあらざるものなり。新世の事、此の如くして、世にあらざるものなり。

學、此の如くして、世にあらざるものなり。新世の事、此の如くして、世にあらざるものなり。

此の如くして、世にあらざるものなり。新世の事、此の如くして、世にあらざるものなり。

此の如くして、世にあらざるものなり。新世の事、此の如くして、世にあらざるものなり。

此の如くして、世にあらざるものなり。新世の事、此の如くして、世にあらざるものなり。

人の如くして、世にあらざるものなり。新世の事、此の如くして、世にあらざるものなり。

此の如くして、世にあらざるものなり。新世の事、此の如くして、世にあらざるものなり。







命をいふにさういふ様ふ申す事と申す事と申す事と申す事と

百八十一

たのむに後世にいはるる事と申す事と申す事と申す事と

忠相書

後の世にいはるる事と申す事と申す事と申す事と

三宅宗元入道治忠の長子と申す事と申す事と申す事と

申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と

天正十二年四月廿七日と申す事と申す事と申す事と申す事と

政のりて防衛と申す事と申す事と申す事と申す事と

ちよと申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と

本城入所と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と

のりて防衛と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と

内府と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と

と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と

に死入事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と

杜野の事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と

小谷清三 信長師妹

いふ事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と

五

信長師妹



夏は秋の暮はけり  
唯廿四の婦人  
文苑の道  
自善の文あり  
あはれなる

○秋及俊一が葬世の詩歌

唯冬光るは長  
吉物尾吉  
あはれなる

て詩歌あり

主仇有前白又空  
可憐晋國刺衣客  
共感生涯一夢中

あはれなる

○邵子葬世の詩

熙寧十年七月四日邵康節あり

生干太平世長干太平世  
年幾何六十有七歲  
然獨無愧

あはれなる







よき後にはふたつ——紙筆をたすくへん  
とめりてんかきふしに書かぬかきふし  
りりかきふし——とて身立の筆を  
さうりへるぬ計圖障子の契沖法師  
いりりかきふしをたすくへん  
中のいり

契沖のいり

梅にふりかきふし——たすくへん  
かきふしをたすくへん  
かきふしをたすくへん

初秋の海をたすくへん  
かきふしをたすくへん  
かきふしをたすくへん

契沖のいりかきふし  
かきふしをたすくへん  
かきふしをたすくへん

契沖のいりかきふし  
かきふしをたすくへん  
かきふしをたすくへん



Handwritten text in Arabic script, top line on the right page.

Handwritten text in Arabic script, second line on the right page.

Handwritten text in Arabic script, third line on the right page.

Handwritten text in Arabic script, fourth line on the right page.

Handwritten text in Arabic script, fifth line on the right page.

Handwritten text in Arabic script, sixth line on the right page.

Handwritten text in Arabic script, seventh line on the right page.

Handwritten text in Arabic script, eighth line on the right page.

Handwritten text in Arabic script, ninth line on the right page.

Handwritten text in Arabic script, tenth line on the right page.

Handwritten section header in Arabic script, located in the middle of the right page.

Handwritten text in Arabic script, first line on the left page.

Handwritten text in Arabic script, second line on the left page.

Handwritten text in Arabic script, third line on the left page.

Handwritten text in Arabic script, fourth line on the left page.

Handwritten text in Arabic script, fifth line on the left page.

Handwritten text in Arabic script, sixth line on the left page.

Handwritten text in Arabic script, seventh line on the left page.

Handwritten text in Arabic script, eighth line on the left page.

Handwritten text in Arabic script, ninth line on the left page.

Handwritten text in Arabic script, tenth line on the left page.







Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines of dense, cursive writing.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 12 lines of dense, cursive writing.



Handwritten text in cursive script, likely a title or header.

優に其に載る。要中、初の事

Handwritten text in cursive script, possibly a name or a specific reference.

Main body of handwritten text in cursive script on the right page, consisting of several lines of dense writing.

Handwritten text in cursive script, possibly a name or a specific reference.

Main body of handwritten text in cursive script on the left page, consisting of several lines of dense writing.

Handwritten text in cursive script, possibly a name or a specific reference.

Handwritten text in cursive script, possibly a name or a specific reference.



~~~~~

廿一 錢鐘抄

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

〇一 路居士

路西仁和寺一代の御門をあり世を道にそと高野山に法を



を擧ぐし侍りたり

月やにむ月をさくくはなれし心も世をよみおとす  
世を為ふ庵のありのありぬかひきき世の下にをさす  
一休日時の人ありあはれ一休初高一路の句曰

萬法有道如何是一路

各曰

萬事可休如何是一休

一休居士の句に草芥錯れり菜蔬をさきて花丹が  
釜裏と粟あり其有るけ鍋細川家の重宝とあつて今ある  
もくも揚たのぬら口がくく下も雑多確と人かゝる

○集外歌仙

集外歌仙の将軍連長の命せしむ國画を添ふたしと云

幸次郎寛

平常保

千葉父常陸六甲  
東六良尚頼末

その心は懐やういふも常寛とさしひくやうはあつて

残春

津守國豊

任吉社務  
信長時代人

いふにふらむかきかきと人いふ心はたやうをぬりちと

山月入簾

海通尼

光隆院殿  
後室

初のおのまはるれはほとあつて秋をさすよき山陽乃月

春祈言

宗長

後柏原院御宇  
連哥師

春祈のあひくくと人のかまふ通ある御代の人たは長年と

寄舟志

宗願

連初師



かゝる書に...  
かゝる書に...  
かゝる書に...

月前

富閑 能登

かゝる書に...  
かゝる書に...  
かゝる書に...

晴雪

正徹 徹書記  
招月庵

かゝる書に...  
かゝる書に...  
かゝる書に...

袖蓮花

正廣 世日頃、正廣、云

物カス簾の...  
物カス簾の...  
物カス簾の...

浦橋衣

蒲葺 椿苗氏  
化基連教所

秋の...  
秋の...  
秋の...

夕野

道灌 大田

かゝる書に...  
かゝる書に...  
かゝる書に...

寒芦風

長慶 三好修理吉

新波風...  
新波風...  
新波風...

旅宿を教

宗養 連多師

風...  
風...  
風...

周 吉

政宗 伊達中納言

け...  
け...  
け...

梅香留袖

兼子 椿苗氏  
兼子

後...  
後...  
後...

遠打鳥

玄陳 里打  
花下先祖



















後乃委向小通し一唱一和に三嘆せしむるに及ぶま  
其直に後世に傳ふことしむるに十廿三酒を飲せり  
月とあせし一十廿五更に酒を全飲せり  
りあのみよふまを酒を飲せり十廿三酒を飲せり  
白樂の教言とて書せしむるに及ぶま  
又一人の仰ふ 稲妻やそのつらき西のつらき下乃也  
文をかくるに及ぶま一乙曲が 草やりのあつたるに  
とつらきまに書せり言ふ所の白の世の中は變遷者  
あつたるに及ぶま一人の胸懐のいふ  
亦作るとして一人の園屋を意傳へしむるに及ぶま

にまにこれより紙のつらき 蟻食うもの  
美境をうづ

又秋のふしをいふに 秋のつらき  
とつらきしむるに及ぶま 又書は書ふま  
小僧の酒をうづ 竹風流をうづ

○初巻の句

初巻や大の足跡梅のふしをいふに 何人のつらき  
口をむしむるに 五え集の巻に 雞去画竹葉是れ山流の傳  
雪の聯句の 大走生梅花のつらき 秋のつらき 又書は書ふま  
つらき 或は 吟のつらき







夏に彼の歌を旅泊の餘修うに読そとてあうんば又要子  
かあらはるに定稿あるをあらとていふはう言ふれ而  
やに定稿を定稿の爲りにあひとていふはう言ふれ  
格をばうにあらとていふはう言ふれ  
馬琴

○父左

元禄六年六月廿日其角が三圍の神社の爲白の世奉て人の  
心とあつ其角が自筆此歌舟 三圍編者別名馬  
真珠氏付也 又え集あまの  
父左やと真名の書とていふはう言ふれ  
傳ふとていふはう言ふれ

父たてや田をみのくくみ神あつと

と傳ふとていふはう言ふれ  
題を用にして父たてやとていふはう言ふれ  
傳ふとていふはう言ふれ  
此白雨とていふはう言ふれ  
とていふはう言ふれ  
古歌にその川のひらちあまのく  
神用と傳ふとていふはう言ふれ  
とていふはう言ふれ  
美濃の雲裡俳諧論ふとていふはう言ふれ











に白とくしつとあり亦婦人の眉をくしつた袋の着る者も  
白とくしつとありつづぬ右の着る者もくしつた袋の着る者  
花とくしつた袋の着る者もくしつた袋の着る者  
はるひつとあり

亦能松の海合に喜書のあつたの旗を打ち揚ぐる人々  
とくしつた袋の着る者もくしつた袋の着る者  
あつた袋の着る者もくしつた袋の着る者  
やうな書に揚ぐる者もくしつた袋の着る者  
揚ぐる人々の事ははくしつた袋の着る者  
かと思つても知のたつた袋の着る者

節のたつた袋の着る者もくしつた袋の着る者  
のはくしつた袋の着る者もくしつた袋の着る者  
これ宮内省の書に揚ぐる者

○芭蕉集

昔はくしつた袋の着る者もくしつた袋の着る者  
昔はくしつた袋の着る者もくしつた袋の着る者  
昔はくしつた袋の着る者もくしつた袋の着る者  
院の御前に昔はくしつた袋の着る者  
白とくしつた袋の着る者

○芭蕉集



是を能登一系に祖あり信然かたを母名に宗房忠義と  
稱しけしと為堂あり嗣子に侍り嗣子日月の志ありて  
秀峯にその入力をありて多てその入文六年四月嗣子死  
と其其死をうぬと後世にけりあまのいあひしうて  
高野を親子にゆづりてまゝの志を首にけりて高野  
にゆめまゝの風をいさすてあに雲ゆりて名を桃香と  
しとよ風羅坊と名し一死家の末末武治川に庵を結  
び泊船堂といふ處に芭蕉一樹を植て是よりして因友あり  
ふふふ成るといへり

芭蕉ゆきしと雪月雨とさくあつた

花の雲 障りてよきうあつた

と服子の美衣をのびしは川ありてのこもせしあつた  
旅のこもはけしと身にほろけしと茶杯のあひの木を  
あつた

隠れしとるを竹舟とあつた

と風の吹かたれ代しと風の所とけりて其屋ありしと  
妻人けりしと

病のあつたにけりてたひあつた

其年しと津路ありしとゆるる心の如任庵にけり  
光景をんとしとあつた年ありて事池本寺佛頂如高野  
法しとひしと因禪の法師といふと夜泊多野の心あり



とわらふといふは庵はほりしつゝ

何のふれはれぬしつゝ

やういふつらなはるのふら十餘年の間女と合はせはるゝ  
の細片の歌りし其後白雲のぬ郷を庵とあし入る三日月の  
あつてはる光をあつてはるあつてはるあつてはるあつてはる  
あつてはるあつてはるあつてはるあつてはるあつてはる

新ふ庵のふれはるしつゝ

いふつらなはるのふら十餘年の間女と合はせはるゝ  
にけりし其後白雲のぬ郷を庵とあし入る三日月の  
あつてはる光をあつてはるあつてはるあつてはるあつてはる  
あつてはるあつてはるあつてはるあつてはるあつてはる

あつてはるあつてはるあつてはるあつてはるあつてはる  
あつてはるあつてはるあつてはるあつてはるあつてはる  
あつてはるあつてはるあつてはるあつてはるあつてはる  
あつてはるあつてはるあつてはるあつてはるあつてはる

本る庵のふれはるしつゝ

あつてはるあつてはるあつてはるあつてはるあつてはる  
あつてはるあつてはるあつてはるあつてはるあつてはる  
あつてはるあつてはるあつてはるあつてはるあつてはる  
あつてはるあつてはるあつてはるあつてはるあつてはる

義仲寺の大津馬場村に有一石庵之跡跡師之室に芭蕉塚あり  
洞堂木俵ありつらなはる其角を奉とけりしつゝ



宣仁其後天有中後八十四の所を以て京國修葺又改め  
建之相堂の内に入敷三十六人と画き各厚く書きて堂を飾

○修學子寺八景和歌

修學晚鐘

去然法親王

これ寺の邊のたれにちかき入相の邊のまにわたりて

村路吟風

中務六知忠親王

またいづれにちかき入相の邊のまにわたりて

遠岫歸鷹

道日老法親王

またいづれにちかき入相の邊のまにわたりて

茅檐秋月

資慶六 鳥丸大細

いづれにちかき入相の邊のまにわたりて

松邊夕照

雅章六 尾崎大細

またいづれにちかき入相の邊のまにわたりて

平田暮雨

具記六 尾崎大細

またいづれにちかき入相の邊のまにわたりて

隣雲夜雨

通茂六 中法中細

またいづれにちかき入相の邊のまにわたりて

殿草尾雪

清春四六 白川神和伯

またいづれにちかき入相の邊のまにわたりて

今按修學子の後水尾氏の歌をとりておもしろく



カニ景云々... 中陰通義干時中... 強隊の...

○藤房の歌

父老房の... 藤房の歌... 藤房の歌...

牧童の... 羊の...

藤房の... 石上の...

今世の... 醍醐帝の... 人法名...







彈正平好仁親王

はるかにあはれみおぼせしむる御子の御女ありまはるかにせよ

從一位藤原信房

あはれみおぼせしむる御子の御女ありまはるかにせよ

從一位藤原忠榮

あはれみおぼせしむる御子の御女ありまはるかにせよ

内大臣康通

あはれみおぼせしむる御子の御女ありまはるかにせよ

從一位藤原實益

あはれみおぼせしむる御子の御女ありまはるかにせよ

從一位藤原定照

あはれみおぼせしむる御子の御女ありまはるかにせよ

中宮太政大臣實德

あはれみおぼせしむる御子の御女ありまはるかにせよ

從一位藤原實勝

あはれみおぼせしむる御子の御女ありまはるかにせよ

從一位藤原光孝

あはれみおぼせしむる御子の御女ありまはるかにせよ

從一位藤原公益

あはれみおぼせしむる御子の御女ありまはるかにせよ



持大御言尊系徳元

おのむすびのちかききかたをいかにせしめしむるにまはるる

持大御言尊系直孝

いかにまはるるにまはるるにまはるるにまはるる

持大御言尊系直孝

おのむすびのちかききかたをいかにせしめしむるにまはるる

持大御言尊系直孝

いかにまはるるにまはるるにまはるるにまはるる

持大御言尊系直孝

おのむすびのちかききかたをいかにせしめしむるにまはるる

持大御言尊系直孝

いかにまはるるにまはるるにまはるるにまはるる

持大御言尊系直孝

おのむすびのちかききかたをいかにせしめしむるにまはるる

持大御言尊系直孝

いかにまはるるにまはるるにまはるるにまはるる

持大御言尊系直孝

おのむすびのちかききかたをいかにせしめしむるにまはるる

持大御言尊系直孝

いかにまはるるにまはるるにまはるるにまはるる











右近衛 隆重

少輔 隆重

隆重

右近衛 隆重

隆重

右近衛 隆重

隆重

中務 隆重

隆重

右近衛 隆重

隆重

右近衛 隆重

隆重

右近衛 隆重

隆重

右近衛 隆重

隆重

右近衛 隆重

隆重



侍従藤原公業

神皇正統記

神武伯耆陣王

神皇正統記

侍従藤原具範

神皇正統記

光深

神皇正統記

海門良波

神皇正統記

尊恒

神皇正統記

出光

神皇正統記

尊光

神皇正統記

良純

神皇正統記

道長

神皇正統記



~~~~~

華門圖

~~~~~

公海

~~~~~

實奥

~~~~~

海門覺定

~~~~~

菅草

~~~~~

義尊

~~~~~

哲孝

~~~~~

子純

~~~~~

夜流

~~~~~

通園



題者 雅胤

讀師 内大臣

講師 為頼朝臣

御製及讀師 関白

講師 日野大納言



